

愛とエロス

—ジョン・ダンの詩を読む

松島正一

学習院大学文学部研究年報 第58輯 抜刷 (平成三年度)
Off-printed from The Annual Collection of Essays and Studies,
Faculty of Letters, Gakushuin University, Vol. LVIII (2011)

愛とエロス

ージョン・ダンの詩を読む

松島正一

(1)

ジョン・ダン (John Donne, 1572-1631) は“*The Metaphysical Poets*”の代表的詩人である。「形而上詩人」と訳されるこの言葉の「形而上」とは、神学も科学もあらゆる教養的な学問をも含んでいるという考え方で、形而上学という一つの狭い考え方ではない。Metaphysicalという呼び名は、ジョンソン博士 (Dr. Johnson, 1709-84) 以来有名であるが、実は銜学的 (Scholastic) という意味を持っていたのである。

形而上詩人のなかに数えられる、いわゆるダン一派には、ジョージ・ハーバート (George Herbert, 1598-1633)、リチャード・クラシヨー (Richard Crashaw, 1612/3-49)、エイブラム・カウリー (Abram Cowley, 1618-67)、マンドリュウ・マーヴェル (Andrew Marvell, 1621-78)、ヘンリー・ヴァーン (Henry Vaughan, 1622-95) などがいる。

ダン一派は社会的には上流階級出身であり、マーヴェルを除き、ダンの系譜に従って大勢は大体において、宗教的には体制、つまり英国国教会に属していた。彼らは「仲間」(coetere) を形成し、彼らの作品の大半は原稿のまま写し取られて、その仲間内で回覧されていた。このことは作者と読者との間に共通の教養や生活感情や体験があっ

たということである。従って、この「仲間」の外側に立つ同時代人や後の時代の人々からすると、彼らの作品は実に不明瞭な性格を持つていることになる。彼らに対する“Metaphysical”という呼び方に非難の意味があるのは、衛学的(scholastic) という言葉の持つ否定的な意味が含まれているからである。言い換えれば、彼らの精神構造に対する別な精神構造を持つ者からの批判と非難が、それらの言葉のなかにひそんでいたのである。たとえば、ドライデンは「ダンは恋愛詩において形而上学を好んで用い、非常に難解な哲学の思索で女性を困惑させる」(『風刺詩の起源と構造』)と述べている。

エリザベス朝詩人シェイクスピアと十七世紀詩人ダンとの年齢差はわずか七歳である事実を知ると驚きである。ダンはエリザベス朝の若い知識人として当時の演劇や詩に親しんだ、いわば最後のエリザベス朝人であり、ローマ・カトリック教徒として豊かな家に生まれ、色々な恋愛をし、改宗し、英国教会の聖職者になったことは、良く知られている。

しかし、ローマ・カトリックから英国国教会への改宗は、「自分が現に抱いているものと自分がこれまで不可侵のものとして見做してきたものを放棄することであり、このような改宗には精神のなみなならぬ裂傷があるので、それはまこと一筋な永続性のあるものではほとんどありえなくなる」(サムエル・ジョンソンは述べている)。

ダンの神学的ないしは哲学的教養がローマ・カトリック教徒のそれであって、トマス・アクイナス(Thomas Aquinas, 1225-74)などを中心とするスコラ哲学であった。ベイコン(Francis Bacon, 1561-1626)はスコラ哲学を「蜘蛛の巣のような学問」(cobweb of learning)と言ったが、ここでは徹底的に緻密な論理の追及が行われている。現実から分析的な論理が発するにせよ、やがて論理のための論理として追及されていく。そこでは弁証法ダイアレクティックが重んじられ、証明の方法として類似が用いられる。ダンはこのような知的な訓練を受けた人間である。

ダンの恋愛詩の特色は、それまで宮廷風恋愛 (the courtly love) としてペトラルカ風恋愛と呼ばれるものからの脱出の試みであると言えよう。貴婦人と騎士、女性が高い身分で男性が女性を慕うという形の宮廷風恋愛は中世社会の構造である。そこでは性愛、結婚は禁じられている。それに対して、ダンの恋愛詩は相思相愛のセックスを伴う愛で、結婚による愛こそが真の愛であると高らかに宣言するものである。

(2)

詩とは語られなければならないこと、そして語られることをどんな詩形に押し込めるかの一種の均衡である。あるいは、語るべきことと、語られることとの妥協と言ってもいいかもしれない。ダンの『エクスタシー』(“The Ecstasy”)は、両者の見事な一致、つまり感情と思考がみごとに調和して、いわゆる“passionate thinking” (グリマン) が達成されている点で典型的な形而上詩の一つといえることができる。

Where, like a pillow on a bed,

A pregnant bank swell'd up to rest

The violet's reclining head,

Sat we two, one another's best.

Our hands were firmly cemented
With a fast balm, which thence did spring;
Our eye-beams twisted, and did thread
Our eyes upon one double string,

So tintergraft our hands, as yet
Was all the means to make us one,
And pictures in our eyes to get
Was all our propagation. (1-12)

ベッドの上の枕のように、土手が
ふつくらと膨らみ、その腹に
葎が頭を傾けている所で
こよなく愛し合う僕たちは、座っていた。

僕たちの手は、そこから滲み出る
濃い香油で、しっかりと接合されていた。
僕たちの視線は、重なり合って

目と目を縫^ユり糸で縫い通していた。

だが、それまでは僕たちは手と手を合わせるだけが

一つになる手段であった。

また、瞳の中に、互いの姿を

宿すことだけが、僕たちの生殖だった。

「枕」「ベッド」「妊娠した」「土手」「膨らむ」、そして最後に「生殖」と、女性の裸体を想像させる語句で始まる。「その腹に傾く葦の頭を乗せている処」は女性の性器を連想させる。そこに「愛し合う僕達は、座っていた」というのは、これからの性行為を暗示している。

眼と眼が重なり、手と手が触れ合い、接木のメタファーは男女が結びつく「生殖」行為を表わしている。この接木のメタファーは『別れの歌、悲嘆を禁じて』のコンパス・イメージにつながっていく。

As 'twixt two equal armies fate

Suspends uncertain victory,

Our souls, which to advance their state

Were gone out, hung 'twixt her and me.

And whilst our souls negotiate there,
We like sepulchral statues lay;
All day, the same our postures were,
And we said nothing, all the day.

If any, so by love refined,
That he soul's language understood,
And by good love were grown all mind,
Within convenient distance stood,

He (though he knew not which soul spake,
Because both meant, both spake the same)
Might thence a new concoction take,
And part far purer than he came.

This ecstasy doth unperplex
(We said), and tell us what we love;
We see by this, it was not sex;

We see, we saw not, what did move: (13-32)

互角の二つの軍の間で、

運命の女神も、どちらに勝たせようか戸惑うように

僕たちの魂も（出世をしようと、

出てきたが）彼女と僕の間で宙ぶらりん。

そして、魂が交渉している間、

肉体は墓場の彫像のように横たわっていた。

終日、同じ姿勢で、

一言も喋らなかつた、終日。

だれにせよ、折よく、愛の純化を受け、

魂の言葉が理解ができ、

愛の力によって精神だけになって

僕たちの近くに立っていたら、

彼は（二人とも同じ意図、同じ言葉で話すので

二つの魂の識別は分からないのだけど

僕たちは新しい混合飲料を飲み、

来たよりは純粹になつて帰るだろう。

恍惚は謎を解き、僕たちが真に

愛していたものが何かを教える、

（と僕たちは言った）。僕たちは恍惚により、それが性セックスでなかつたことを知る。

僕らを動かしたものを知らなかつたと知る。

男女の恋愛を「二つの軍」と戦争のイメージで語りながら、自分たちが求めていたのは性(sex)ではなく、「二人を動かした」恍惚であつたことが分かる。ここでのセックスは肉体交渉の意味で、OEDによると、この意味で使つた最初の例である。

But as all several souls contain

Mixture of things they know not what,

Love, these mix'd souls, doth mix again,

And makes both one, each this, and that.

A single violet transplant,

The strength, the color, and the size,

All which before was poor and scant,

Redoubles still, and multiplies.

When love, with one another so

Interanimates two souls,

That abler soul, which thence doth flow,

Defects of loneliness controls.

We then, who are this new soul, know,

Of what we are composed, and made:

For th'atomies of which we grow

Are souls, whom no change can invade. (33-48)

しかし、それぞれの魂はすべて

自分の知らない混合物を含んでいるように、

愛はこれら混じり合った魂をもう一度混ぜ、

二つのそれぞれの魂を一つにする。

一本の莖を移植すれば、

活力も色も大きさも

それまでは貧弱で乏しかったすべてが
倍加され、さらに幾層倍にもなる。

愛が二つの魂をこうして、

新たな生氣を加えさせるとき、

そこから流れ出るより強力なあの魂は、

孤独の欠陥を防いでくれる。

そのとき、この新しい魂である僕らは知る、

僕らが何から出き、作られているかを。

僕らのそもそもの源である原子たちは、

どんな変化も侵すことができないから。

愛は観念的なものではなく、実践して始めて分かるものなのである。魂はこの愛によって、今まで「知らなかった

混合物」となり、新しい愛となる。ここまでは、董が咲く土手で恋人たちが「頭を傾けて」座っている至福の状態である。二人は一つになっていることが、様々な「一」で説明される。これはプラトニック的な「一」のアイデアである。形而上詩の特色は *but, yet* などの機能が高いことだ、と言われているが、第四九行目の *But* で、これまでの論理が引っくり返される。肉体の肯定が始まる。

But oh, alas, so long, so far,

Our bodies why do we forbear?

They're ours, though they're not we; we are

Th'intelligences, they the sphere.

We owe them thanks, because they thus

Did us, to us, at first convey,

Yielded their forces, sense, to us,

Nor are cross to us, but allay.

One man heaven's influences works not so,

But that it first imprints the air;

So soul into the soul may flow,

Though it to body first repair: (49-60)

しかし、ああ、なんと長く、これほどまでに

僕らは自分の肉体を控えるのか。

肉体は僕ら自身ではないが、僕の所有物だ。

僕らが天使^{エンジェル}で、肉体は天使の支配する天球なのだ。

僕らは肉体のおかげを蒙っている。なぜなら、

肉体が最初に僕らを僕らへと運び、

その能力すなわち感覚を僕に与えてくれたから。

肉体は僕らにとって金層ではなく、合金なのだ。

天の星々の影響力が人間に直接及ぶはず、

最初は大気に刻印するのだ。

同じように魂は魂に流れるのだが、

始めは先ず肉体のもとに赴くのだ。

肉体とはイデア的なるものの啓示の手段であり、ダンは肉体を天球、魂を運行を司る天使ととらえている。二人の

心の一致は、二人の肉体の一致と不可分なのである。

As our blood labours to beget

Spirits, as like souls as it can,

Because such fingers need to knit

That subtle knot, which makes us man:

So must pure lovers' souls descend

T' affections, and to faculties,

Which sense may reach and apprehend,

Else a great prince in prison lies.

T' our bodies turn we then, that so

Weak men on love reveal'd may look;

Love's mysteries in souls do grow,

But yet the body is his book.

And if some lover, such as we,

Have heard this dialogue of one,

Let him still mark us, he shall see

Small change, when we're to bodies gone. (61-76)

僕たちの血液は、できる限り魂によく似た

精気を生み出そうと陣痛を起こす。

そのような指が必要だからである、

僕らを人間にする微妙な結び目を作るためには。

それ故に、純粋な恋人の魂は

感覚でとらえて、把握される

愛や、その営みまで下りるべきだ。

さもないと、偉大な愛の大公も牢屋の中だ。

だから、僕たちは肉体に戻ろう、

心弱い者にも愛の啓示を見られるように。

愛の神秘は、魂の中で育つが、

肉体は、その教本なのだ。

誰か、僕たちのような恋する者が

二人一体のこの対話を聞いたなら、

彼を僕たちに注目させよう、

僕たちが肉体に赴いても殆ど変化しないことを。(61〜76)

ここには、普遍的でない、きわめて具体的な恋愛の状況に対するダンの捉え方がある。恋愛における肉 (body) と 霊 (soul) の葛藤に対するスコラの論理・弁証ダイレクティブによる、二つのものの調和がある。これは、王党派の人々が持っていた感情的な思考、あるいは思想的感情というアナロジー的な心情 (analogous mentality) によるものである。この詩『エクスタシー』においては、この調和はみごとに達成されているが、このバランスは非常に微妙デリケートなものでもある。

(3)

男女の愛をコンパス・イメジで描いたことで有名な『別れの歌 悲嘆を禁じて』(“A Valediction: forbidding mourning”) を取り上げよう。この詩はダンがサー・ロバート・ドルアリに付き添って大陸旅行をした際に、妻アンに与えたものと言われている。

But we, by a love so much refined,

That ourselves know not what it is,

Inter-assured of the mind,

Care less, eyes, lips, and hands to miss.

Our two souls, therefore, which are one,

Though I must go, endure not yet

A breach, but an expansion,

Like gold to airy thinness beat.

If they be two, they are two so

As stiff twin compasses are two;

Thy soul, the fix'd foot, makes no show

To move, but doth, if th'other do.

And though it in the center sit,

Yet, when the other far doth roam,

It leans, and hearkens after it,

And grows erect, as that comes home.

Such wilt thou be to me, who must,

Like throther foot, obliquely run;

Thy firmness makes my circle just,

And makes me end where I begun. (17-36)

しかし、僕ら自身が何者か分からないほどに

愛の力によって、純化された僕たちは、

お互いの心は変わらないと信じ合い、

目や、唇や、手を失うことを気にしない。

一つになった僕たち二人の魂は

僕が旅に出ても、それで

引き裂かれることはない。薄く延ばした

金箔のように、拡がるだけである。

もしも、僕たちの魂が二つであるなら、

コンパスの二本の脚のように二つだ。

君の魂は固定された脚、もう一方が

動く気配はないが、動けば一緒に動く。

君の脚は中心に座っているが、

もう一方が遠くへさまよえば、

その方に身を傾け、その音を聞こうとする。

だが、もとへ戻ってくれば、直ぐに立つ。

君は僕に対してそのような存在であり、

僕はもう一方つの脚のように、斜めに走らなければならない。

君の堅固さが、僕の描く円を正確なものにし、

僕は出発した地点で旅を終わらせることができるのだ。

コンパスの脚点を中心にした円の図形は、錬金術では金を表わし、金は唯一の絶対不滅の金属であり、二人の愛の不滅の比喩となる。このような奇想 (conceit) を用いた用いた作品として、「女性に誠実な貞操を求めるのは流れ星を拾うようなものだ」(『ソング 行って、流れ星を捕まえて』“Song: Go, and catch a falling star”)、「蚤が男女と刺して血を吸うと、男、女、蚤が結婚することになる」(『蚤』“The Flea”)などをあげることができる。

ダンの傑作と言われる『聖ルーシー祭のノクターン』について論じよう。三〇四年に没したと言われる聖ルーシー（ルキア、ルチア）はシチリア島シラクサ出身の童貞殉教聖女で、幾人かの求婚者の申し出を断り、貧者に自分の富を施した。当時はキリスト教を迫害していた皇帝ディオクレトスの時代であったが、彼女はキリスト教徒の一味であると訴えられた。数々の試練や拷問を受けても無傷であったが、最後には剣で刺殺された。

彼女の両眼にまつわる伝説は、ルーシーが光（ラテン語の *lux* は光の意）を意味することから来ている。ある伝説では、彼女は拷問官によって両眼をえぐりだされたが、奇跡的にも傷は回復された。また、求婚者がルーシーの美貌ゆえに苦悶していると不平をもらすと、彼女は自らの手で両眼をえぐり出したという異説もある。

イギリスでは一七五二年に暦が変わるが、それまでは彼女の祝日である「聖ルーシーの日」は十二月十三日、旧暦ではこの日は一年中で最も昼が短い日であるとされた。ダンが詩の題材としてこの日を選んだ理由は、ベッドフォード伯爵夫人の名がルーシーであったからと言われている。

詩はこう始まる。

Tis the year's midnight, and it is the day's,

Lucy's, who scarce seven hours herself unmasks.

The sun is spent, and now his flasks

Send forth light squibs, no constant rays;

The world's whole sap is sunk:

The general balm th'hydropic earth hath drunk,

Whither, as to the bed's feet, life is shrunk,

Dead and inter'd; yet all these seem to laugh,

Compared with me, who am their epitaph. (1-9)

今宵は一年の真夜中、そして聖ルーシーの日の真夜中、

太陽は七時間そこそこしか姿を見せない。

太陽は疲れ、いま火薬粉ほどの星屑は

弱い閃きを放つだけで、ゆるがぬ光線はない。

世界の樹液は沈み

世界の雨を乾きにあえぐ大地が吸い込み、

そこへ、寝台の足のほうへ、世界の生命は引き寄せられ

死んで埋められた。しかしこれらすべても、私に比べると

笑っているように見える。私は悲しみの墓碑銘だから。

真夜中とはどのような時であるかを考えてみると、人はその精神が奇妙な状態になる時である。夜の終わりであると同時に、朝の始まりでもある。そして、それが一年で最も夜が長い「聖ルーシーの日」であれば、この現在にあつ

て人は過去と未来を思うのも当然であろう。昼の喧騒が遠のき、夜の静寂のなかで、外部がどうなっているのか。外部に対して内部は？ 人は生きていることの不安を感じると同時に、いつもより物が物として明瞭に見えると思える瞬間を意識する。

詩人は死んだ恋人を思い、恋人なき生活の空しさを嘆き、自分も早く彼女のあとを追いたいと思う。

Study me then, you who shall lovers be

At the next world, that is, at the next spring:

For I am every dead thing,

In whom love wrought new alchemy.

For his art did express

A quintessence even from nothingness,

From dull privations, and lean emptiness:

He ruin'd me, and I am re-begot

Of absence, darkness, death: things which are not. (10-18)

だから、恋をする者たちよ、この私から学ぶのだ
次の世に、すなわち、来る春に。

私は死せるものすべからずあり、

私に対して愛が新しい錬金術を施したのだから。

愛のたくみがこの無から

暗い窮乏から、やせた空虚から

万物の大初の元素を抽出した。

愛はわたしを破滅させた。そして私は甦る、

虚無、暗黒、闇、死、つまり存在しないものから。

一年の終わりである「聖ルーシーの日」は新しい年の始まりでもある。詩人は、この世が逝き、新しい世界、つまり新春が来たときに恋するものたちは、私から学んで欲しいと言う。

詩人は自分が彼女を愛した当初既に「無（nothingness）」つまり「存在しないもの」であった。それは「暗い窮乏」「やせた空虚」であり、「虚無」「暗黒」「闇」「死」の状態である。恋人を失ったことが彼をこのような状態に陥らしてしまっただけだ。

この詩の特徴は「窮乏」「存在しないもの」などの否定的なもの、 「万物の大初の元素」肯定的なものを並べる点にある。つまり、詩人は恋人の死による自分の死を「万物の大初の元素」にすることによって、甦えろうとするのである。

All others, from all things, draw all that's good,
Life, soul, form, spirit, whence they being have;

I, by love's limbeck, am the grave
Of all, that's nothing. Oft a flood
Have we two wept, and so
Drown'd the whole world, us two; oft did we grow,
To be two chaoses, when we did show
Care to aught else; and often absences
Withdrew our souls, and made us carcasses. (19-27)

わたしの他のすべての人は、すべての物から良いものすべて、
生命、魂、形相、精神を引き出し、そこから生存を始める。

私は愛の蒸留器で、すべての、
無なるものの墓となった。しばしば

私たち二人は涙の洪水を流し、そのため
全世界、すなわち私たち二人は溺れた。しばしば私たちは
二人以外のことに気を移すと、
二つの混沌となった。またしばしば別離が
私たちの魂を脱け出して、私たちを屍にした。

ここには聖書のイメジが多く登場する。洪水で溺れた二人。「混沌」とは『創世記』の巻頭の「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」を思い出させる。混沌から創造が始まったのである。

But I am by her death (which word wrongs her)

Of the first nothing the elixir grown;

Were I a man, that I were one

I needs must know; I should prefer,

If I were any beast,

Some ends, some means; yea plants, yea stones detest,

And love; all, all some properties invest.

If I an ordinary nothing were,

As shadow, a light, and body must be here. (28-36)

しかし私は彼女の死（この言葉は彼女を傷つける）によって
宇宙創造以前にあつた無の無となった。

もし私が人間であるならば、人間であることを
必ず知るはずである。もし獣であるならば、

何らかの目的、何らかの手段を選ぶだろう。

いや、草木や石でも憎みもすれば愛しもする。

すべてはすべてに何らかの特質を授けている。

もし私が影の様な通常の無ならば、

光と物体がそこにあるはずである。

しかし、これから春に向かう太陽は山羊座にある。山羊座は黄道 (Zodiac) の十二宮のうちの十番目で、太陽は十二月二十一日頃にこの宮に入る。また、山羊 (goat) は繁殖力の強い動物であり、「新しい愛欲の力」 (new lust) を象徴している。

『愛の錬金術』 (“Love’s Alchemy”) にも「恋人たちは豊かな長い喜びを夢みながら／冬みたいな夏を送っている」とあったが、「若者よ、きみたちの夏を享受したらいい」には“Carpe diem”の主題が垣間見られる。「彼女のもとに逝く」ことによって、ルーシーと聖ルーシーとの結合がなされ、生と死が一体となる。

But I am none; nor will my sun renew.

You lovers, for whose sake the lesser sun

At this time to the Goat is run

To fetch new lust, and give it you,

Enjoy your summer all.

Since she enjoys her long night's festival,
Let me prepare towards her, and let me call
This hour her vigil, and her eve, since this
Both the year's and the day's deep midnight is. (37-45)

しかし私は無である。私の太陽も甦らないだろう。

きみたち愛し合う者よ、きみたちのために空の小さな太陽は

いま山羊座に向かって急いでいる。あれは

新しい愛欲の力を得て、きみたちに与えるためだ

若者よ きみたちの夏を享樂したらいい。

今宵、彼女は永い一夜の祭りを樂しむのだから、

彼女のもとへ逝く用意をし、このひと夜を

あのひとを祀る祀る前夜祭とも呼ぼう。

今宵こそ一年の真夜中の、一日の真夜中であるから。

(5)

ダンの詩を理解するためには、彼とパトロン（またはパトロネス）との関係が重要であるといわれる。とりわけ

ベットフォード伯爵夫人ルーシーは、妻となったアンに次いでダンに靈感を与えた女性である。「トウイクナム庭園」(“Twickenham Garden”) で歌われる女性こそベットフォード伯爵夫人その人である。ベットフォード伯爵夫人は、一六〇三年スコットランド王ジェイムズが英国王ジェイムズ一世として即位するとき、ただちにエジンバラまで出向き、王妃トナルアンの筆頭女官の地位を得る。以来、一六二〇年までロンドンの宮廷の最も影響力のある女性であった。彼女は一六〇七年から一六一七年まで、トウイクナム庭園を彼女の邸宅とした。庭園は宇宙の地球を中心としたイメジを表わした左右対称の計画で念入りに設計されていた。この庭園には噴水はなかったが、ダンはこの庭園の様子をここに書きこんだと言われる。

ダンとベットフォード伯爵夫人の関係は、騎士と貴婦人の関係であり、この詩は彼女への思慕を歌う宮廷風恋愛詩、ペトラルカ風恋愛の形式となっている。

Blasted with sighs, and surrounded with tears,

Hither I come to seek the spring,

And at mine eyes, and at mine ears,

Receive such balm as else cures every thing.

But oh, self-traitor, I do bring

The spider Love, which transubstantiates all,

And can convert mamma to gall;

And that this place may thoroughly be thought

True Paradise, I have the serpent brought. (1-9)

溜息に吹かれ涙に押し流され、

ここに来るのは春を探すため、

わが眼わが耳に香膏を受け取るため、

ふつうならすべてを治してくれるのに。

だがおお、自己逆逆者の私がつけてくるのは蜘蛛の愛、

すべてを変質させるもの、

マナを苦汁に変えるもの。

ここが正真の樂園と思われるため、

私は蛇を持ってやって来ました。

詩人は「春を探すために来た」と言うが、春は夫人の微笑み、寵愛であり、その微笑みは宮廷での官職の約束である。蜘蛛は食べたものすべてを毒に変質させると信じられていた。

「マナを苦汁に変える」とあるが、マナはイスラエル人がエジプト脱出後、神から与えられた食物であり、「苦汁」(gall)は聖書では苦味のハーブで、「苦しい目にあって」(in the gall of bitterness) (Act 8:23) という成句がある。

詩人はこの庭園に「蛇を持って来て」、ここをエデンの園に変えようとした。アダムとイブは蛇の誘惑に負けて、エデンの園を追放された。ここでの蛇とは詩人の心に潜む野心、誘惑を表わす。ダンにとって野心とは官職であり、誘

惑とは性的なものではない。

"I were wholesomer for me that winter did

Benight the glory of this place,

And that a grave frost did forbid

These trees to laugh and mock me to my face;

But that I may not this disgrace

Endure, nor yet leave this garden, Love let me

Some senseless piece of this place be;

Make me a mandrake, so I may grow here,

Or a stone fountain weeping out my year.

もし冬がこの庭園の美観を暗いものとし、

また、きびしい霜が、これらの木々の笑いや

私への嘲りを禁じたら、

私はこれほど不幸ではないだろうに。

だが、私がこの恥辱を忍ばなくてはすむように、

また、この庭園を去らなくてもすむように、恋の神よ、

私をこの庭園の中の、鈍感な何かの姿にして下さい。
恋加子にして下さい、ここで呻くことができるように。

またはおのれの年月を泣きくらす石の噴水にして下さい。

詩人は不幸のようである。春を求めてきたのに、庭園は冬であるようだ。愛することを続けたいが、苦しみは避けたいという詩人の願い、彼は二律背反のなかで苦しんでいる。いや、それとも楽しんでいるのか。マンドレイクは二股の根を持つが、根を引っ張ると、人間のような悲鳴をあげるといわれる。ダンは「行って、流れ星を捕まえる」(“Go, and catch a falling star”)の二行目にもマンドレイクを登場させている。彼は自分が泉と化した場合を想定し、自分を庭園の一部にしてくれと祈願するのだ。

Hither with crystal vitals, lovers come,

And take my tears, which are love's wine,

And try your mistress' tears at home,

For all are false, that taste not just like mine.

Alas, hearts do not in eyes shine,

Nor can you more judge women's thoughts by tears,

Than by her shadow what she wears.

O perverse sex, where none is true but she,

Who's therefore true, because truth kills me.

恋するものよ、ここにびんを持って来て

私の涙を入れよ、それは愛のワイン、

そして家できみの相手の涙を試されよ、

私の涙の味がしない涙などすべて偽物。

ああ、女の心は眼に出て輝かない、

女心を涙で判断できないのは

女の着ているものをその影で分らないのと同じこと。

おお、女とは邪よこしまな性よ、真実なのは彼女だけ、

彼女方の真実が私を殺すゆえに。

彼の感情は泉のイメージの巧妙さで和らげられる。私の涙が「愛のワイン」、これはミサのイメージである。恋愛する男の涙を持ち帰り、自宅の涙と比べてみるという。「邪よこしまな性」とはベッドフォード伯爵夫人のことであろう。女性の邪（不実）を風刺し、しかも彼女の真実（純潔）を信じ、かつその真実（彼女が私に肉体を許さないこと）が自分を苦しめるのだと言う。

(9)

ダンの恋愛詩集『唄とソネット』(*Songs and Sonnets*)では、感情と思考がともに激しいものであるが故に、その調和が火花を散らすような緊張感を漂わせている。若きジャック・ダンの恋愛詩は若き宮廷人たちに大きな影響を与えたが、後期のダン博士(Dr. Donne)の宗教詩は、王党派の宗教家たちに大きな影響を与えていた。彼の『聖なるソネット』(*Holy Sonnets*, writ.?1621-31)を中心とする宗教詩(*Divine Poems*)においても恋愛詩とはほぼ同じ性格が示されている。

Thou hast made me, and shall thy work decay?

Repaire me now, for now mine end doth haste,

I run to death, and death meets me as fast,

And all my plesures are like yesterday,

I dare not move my dim eyes any way;

Despaire behind, and death before doth cast

Such terror, and my feebled flesh doth waste

By sin in it, which towards hell doth weigh.

Only thou art above, and when towards thee

By thy leave I can look, I rise again.

But our old subtle foe so tempteth me,

That not one hour I can myself sustaine.

Thy grace may wing me, to prevent his art,

And thou like adamant, draw mine iron heart. (*Holy Sonnets* 13)

あなたは私を作られた、あなたの仕事が潰えるだろうか。

今こそ私を作り直してください、私の最後が近づいていますから、

私は死に向かつて駆け、死も同じくらい速く私を迎えにきます、

私の楽しみはすべて昨日のことのよう。

私はよく見えない自分の目をどちらにも向ける勇氣はありません、

後には絶望、前には死が、同じように強い恐怖を投げつけ、

弱まったこの肉の身は、そのなかの罪ゆえに消え去ろうとしますが、

罪が肉を地獄の方に引き寄せます。

ただ、あなたのみが高き所にいまし、あなたに向かつて

許しを得、私がこの目をそそぐとき、私は再び起ち上ります。

しかし、あの狡猾な敵が、私を巧みに誘うので、

一時たりと私は自分を支えることができないのです。

あなたの恩恵は、私に翼を与え、敵の手管を挫くのです、

あなたは、アダマントのように、私の鉄の心を引き寄せるのです。

愛は女に対する恋愛の場合でも、神に対する清らかな愛（聖愛）の場合でも、対象との一体化を願うものである。激しい恋愛をしたダンはまだ激しく神を愛したと言ってもいいかもしれない。彼の宗教詩には常に劇的な状況の設定があり、同時に合理的な弁証がある。そしてこれら二つの性格が確かに調和していると言える。女性を冷静な論理で燃え上がるばかりに口説いたのと同じように、ダン神を口説いていることは確かである。女性は彼の求めに応じた。だから彼の詩にはしばしばエクスタシーが現われる。けれども神は彼の求めに応じたかどうか。少なくとも神が応じたという確信と、その確信から来る心の平和、静けさと喜びが彼にあったかどうか。我々がダンの宗教詩を読んで感じるのは、彼と神との間の愛は一方的であり、神に愛された者のあふれた喜びと平和はそこにはない。しかしそれだけ神の愛を求める激烈な苦闘、女の愛を求めるよりもっと激しい苦闘がそこにあることを彼の詩は示している。

Oh might those sighs and tears return again

Into my breast and eyes, which I have spent,

That I might in this holy discontent

Mourn with some fruit, as I have mourn'd in vain.

In my idolatry what showers of rain

Mine eyes did waste? what griebs my heart did rent?

That sufferance was my sinne, now I repent;

Because I did suffer, I must suffer pain.

Thydropic drunkard, and night-scouting thief,

The itchy lecher, and self-ticking proud

Have the remembrance of the past joys for relief

Of coming ills. To poor me is allow'd

No ease; for long yet vehement grief hath been

The effect and cause, the punishment and sin. (*Holy Sonnets* 14)

ああ、私がい果たしたあの溜息と涙が

私の胸と眼にもう一度戻りますように。

この聖なる不快のなかで、嘆いて何らかの実りがあるように。

今までは空しく嘆いてきたのですが。

偶像崇拜のために、雨のような涙を

私の眼はなんと無駄にしたことか。どれほどの悲しみが私の胸を引き裂いたことか。

あの苦惱は私の罪でした、今こそ私は後悔する。

かつて私は耐えたのだから、この苦痛にも耐えねばならない。

水腫症という渴きの病に苦しむ酔っぱらい、夜に歩き回る盗人、

むずむずと身悶える好色漢、自らをくすぐる傲慢な人間は

やがてくる災いの救いにもなる過去の喜びの思い出を持ち、

この哀れな私には何の慰めも与えられない、

なぜなら、長く、しかも烈しい悲しみが

結果と原因であったし、罰と罪であったのだ。

ダンは一六一五年にはセントポール寺院の司祭になったが、イギリスにおけるローマ・カトリック詩人の最初であり、イギリス最初の個性的な宗教詩人であると言われるのも当然であろう。彼はキリスト教徒という資格で、キリスト教徒の心を単に表現しただけでなく、一個の悩める魂、一個の精神の葛藤と憧れを表現した風変わりな詩人であったと言える。

（付記）ジョン・ダンの詩は Donald R. Dickson (ed.), *John Donne's Poetry* (Norton Critical Edition, 2007) による。

他で、Sir H.J.C. Grierson (ed. with introduction), *The Poems of John Donne* (1912, Oxford Clarendon Press) も参照した。